



学校だより

令和6年 7月 19日

東京都立村山特別支援学校

校長 阿部 智子

〒208-0012

武蔵村山市緑が丘 1460 番地 1

電話：042-564-2781

「子供たちが考えることを大切に、蓄えて、定着、そして自信につなげる夏に」



【村山特別支援学校の本校舎解体工事現場を見て】

7月3日(水)に本校舎の様子を見てまいりました。写真は国立感染症研究所村山庁舎側から、東京小児療育病院側に向かって撮影した本校舎跡地です。全ての校舎、体育館がなくなりました。解体工事は予定通り順調に行われていると報告を受けました。50年の歴史のある校舎ですから、この更地を見ると感慨深いものがあります。今まであった物を壊し、それを元に戻すのではなく、新たに作り出していくということは、とてもエネルギーのいることだと実感しました。覚悟を必要とするものだとも思いました。

昨年、令和5年5月8日に感染症法での新型コロナは、2類相当から季節性インフルエンザと同じ5類になりました。とはいうものの、その後も、学校内では感染症対策を行い、学びを止めないという意識をもち、体育等の授業などを別として、児童・生徒在校時の教職員のマスク着用などは継続しています。今年4月以降も新型コロナやインフルエンザの感染も未だ、なくなっておらず、肢体不自由のある本校の子供たちへの影響はゼロではないと考えます。

しかし、すでに前向きに対処していく時期が来ているのも事実です。では何ができるのか。

この先、全てを、コロナ前のように元に戻すという考えではなく、新たな日常を過ごしていくために、学習指導要領に則って12年間の村山での学校教育をどう組み立てていくかを再構築していくチャンスであると強く感じています。「以前はこうだった」ではなく「これからどうするか」です。写真のような更地を掘り返して、柱を立てるところから始めるわけですから、楽しみしかありません。子供たちも、教職員も、たくさん「考えて」自分たちの「力を蓄える」そうした「熱い夏」となると素晴らしいことです。一日一日の時間を大切に、この夏を過ごしてまいりましょう。

【正門周辺、プランターに植えられたニチニチソウ】



7月の雨にも負けず、風にも夏の暑さにも負けず、緑が丘校舎の正門周辺を彩っているニチニチソウの写真を撮りました。ニチニチソウは、その名の通り毎日絶えることなく咲く力強さをもっていて、それが名前の由来だそうです。白色の花言葉は、「生涯の友情」、赤色が「楽しい思い出」、ピンクが「優しい思い出」と友情を伝えるのにぴったりの言葉にあふれた花です。

長年の付き合いの友人や大切な親友への心からの感謝と友情を伝えるには、白のニチニチソウがよいのだそうです。御来校の折、改めて、正門入口のニチニチソウを眺めてみてください。絶えることなく、次から次へと花を咲かせています。児童・生徒の計画では、「この花を押し花にして、しおりを作成して交流や文化祭で配布する」ということです。花を植えて愛でるだけでは終わらせない！「友情」や「優しさ」を花言葉とするこのニチニチソウを教材として児童・生徒が作品とすることで、交流や文化祭でのコミュニケーションの手段となるように、私はとても期待をしています。

【総合防災訓練・宿泊防災訓練・引き渡し訓練、御協力ありがとうございました】

7月12日(金)、13日(土)に北多摩西部消防署の全面的な御協力をいただき実施することができました。登校便のスクールバスが営業所に向けて学校を出るとすぐ、午前9時10分には起震車、消防車両が到着し、煙体験ハウス



の設置、消火器訓練の準備、防災学習と雨が降っているにもかかわらず、全学部の児童・生徒が体験することができました。

起震車体験に関しては、特別支援学校だけではなく様々な団体からの体験の申し込みの希望が多く、本校のように、全ての学部で体験できるというのは大変貴重なことです。もし、次年度も起震車体験が可能であったならば、PTA活動や地域との連携など組み入れていければと考えました。御協力をいただけると幸いです。

また、12日午後には、保護者の皆様、引き渡し訓練のお迎いの御協力、ありがとうございました。雨の日だったので車も渋滞して

いたと聞きました。災害が起こったらどのようなルートが有効なのかなど、これを機会に御家族での話題になさってください。

今回は、私も起震車体験をさせていただきましたが、13年前の2011年3月11日午後2時46分の東日本大震災の地震の記憶がよみがえってきました。「あの時」は、東京でも騒然となる揺れでした。私は、5時間目の生活単元学習の授業をやっているときで、とにかく子供たちの体を丸めて、机の下に入り、とても長い時間、尋常ではない地震の揺れからひたすら子供たちの頭を守っていた。という鮮烈な記憶です。地震の揺れは一度ではなく、二度目の揺れは、正直、恐怖でした。他の教員と連携して子供たちを連れ、グラウンドに避難したときに見上げた空は、どんよりとした雲が立ち込め、とても寒かったことが忘れられません。この後、東北地方では信じられない大津波があり、被害状況は恐ろしいもので、東京にいる私たちも余震におびえる日々が続きました。計画停電も多摩地域は実施され、私は、職員室で懐中電灯を付けてパソコンに向かうということも経験しました。「あの時」はいつ来るのかわからない。「その時」に冷静な自分であるために、皆が総合防災訓練などの全校での防災訓練を活用して、災害への備えを自分事としていけるとよいのだと思います。高1の生徒は、緑が丘校舎に初めて泊まって学習しました。終業式ではその体験を全校児童・生徒の前で発表してくれました。自助、共助の気持ちを皆がもてるように、教職員一同で思いやりと信頼の心を育てていきます。

【授業づくりは教員の核となるものだから頑張れる】

学校では、教職員が常に自分たちの授業づくりの向上のため、研究授業を行っています。その研究授業について同僚教員や先輩教員の意見を聞いて、次の授業で共有し改善していくための研修を繰り返しています。写真はその「**授業者サポート会議**」の様子です。この研修では、研究授業を実施する前、実施後に、学習指導案をもとに授業のねらいや、言葉掛けの方法、教材の提示の仕方、他の教員との連携方法など、意見を出し合い、良かった点、授業改善の糸口などを検討しました。

この「**授業者サポート会議**」を行える時間は、児童・生徒が帰った後の放課後です。事務作業や行事計画、教材準備、教室

整備もありますが、児童・生徒と向き合わなければならない授業づくりは教員としての核になるととても大切な部分です。9月には、個別指導計画の評価について保護者面談が行われます。保護者の皆様も、教員とともに、ぜひお子様の個別指導計画の授業のねらいや授業における学習評価について一緒に考えていただければと思います。



【夏季休業中の学校閉庁日について】

一人一台端末の導入により、ICTの活用も急激な発展を遂げたため、変化についていながらICT機器を使いこなすための努力が教職員に求められていて、子供たちへの指導力も問われています。教職員は夏季休業などを活用し、急激な教育の流れや変化に追いつき、知識を身に付けるための研修などに取り組まなければなりません。こうした流れの中で、今年度は、**8月13日(火)から8月19日(月)**が本校の学校閉庁日となります。

この期間は週休日同様、学校の代表電話はつながりません。緊急時にはお知らせしている学校携帯への御連絡をお願いいたします。

校長 阿部 智子